

# 大学生の対人葛藤解決方略に関する研究

深田博己・山根弘敬

A study on the resolution strategies in interpersonal conflict among college students

Hiromi Fukada and Hirotaka Yamane

対人葛藤場面における大学生の対人葛藤解決方略タイプの選択・使用に及ぼす対人文脈（葛藤相手の父親、母親、同性の親友）、使用文脈（1回目の最良の方略、2回目の障害後の方略）、被験者の性（男性、女性）、および方略タイプ（協調方略、対決方略、回避方略、同調方略）の影響を検討した。自主的行動の妨害の性質をもつ仮想の葛藤場面を小冊子で被験者に呈示した。被験者は76名の大学生（男性38名、女性38名）であった。主な結果は次のとおりであった。解決方略全体の使用可能性は、父親との葛藤の場合の方が同性の親友との葛藤の場合に比べて高く、障害後の方略の方が最良の方略に比べて高く、女性の方が男性に比べて高く、協調方略、対決方略、回避方略、同調方略の順に高かった。また、協調方略の使用可能性は母親との葛藤の場合が最も高く、同調方略の使用可能性は父親との葛藤の場合に最も高く、対決方略の使用可能性は同性の親友の場合に最も低く、回避方略の使用可能性は母親との葛藤の場合に最も低かった。しかし、こうした傾向は、大学生の性要因の影響を大きく受けていた。

キーワード：対人葛藤、解決方略、対人文脈、使用文脈、大学生

## 問 題

### 1. 対人葛藤とは

葛藤 (conflict) は、個人内葛藤と社会的葛藤とに大別される。そして、社会的葛藤はさらに個人間葛藤と集団間葛藤に分類できるが、個人間葛藤を対人葛藤 (interpersonal conflict) という。葛藤の研究は、K. Lewin の接近-接近型、回避-回避型、接近-回避型の葛藤に代表されるように、個人内葛藤の研究から出発したが、近年は対人葛藤や集団間葛藤の研究にその関心が移行してきた(藤原, 1995)。

対人葛藤の概念は研究者によって若干異なり、潜在的葛藤と顕在的葛藤の両方を葛藤として捉える立場と、顕在的葛藤のみを葛藤として捉える立場がみられる。

例えば、大淵・福島 (1997) は、「対人葛藤とは他者との顕在的・潜在的対立を含む社会状況であ

る」(p.155)と述べ、大迫・高橋(1994)は、「対人的葛藤事態とは、二者関係において両者がある事柄に関して相反する方向の欲求や意見などをもち、それぞれが自己の欲求や意見に従った行動をとろうとすることによって生じる緊張状態である」(p.46)と考えている。また、藤原(1995)は、対人葛藤を「2人以上の人々…が、相反する成果を得ようとして対人間…に生じる緊張状態」とみなし、藤森(2002)は、「対人葛藤は…、個人の欲求や期待などが他者によって阻止されていると個人が知覚するとき生起する対人過程である」と捉えている。対人葛藤に関するこれらの定義は、欲求、期待、意見といった個人の内的反応が個人間で対立する状態を強調しており、表出された行動上の対立である顕在的葛藤だけでなく、外に現れない潜在的葛藤も含めて対人葛藤と考える立場に属する。

これに対して、他方では、対人葛藤を顕在的葛藤に限定する立場がある。長峰(1966)は、「単なる二者間の不一致ではなく、一方の側の行為のためにもう一方の側が自分のしたいことをできなくなる状況」という Selman, Krupa, Beardslee, Schultz, & Podorefsky (1986) の対人葛藤の定義を採用している。また、Laursen (1993) は、対人葛藤を対立行動 (oppositional behavior) という用語で定義している (p.40)。続いて、Laursen & Collins (1994) は、対人葛藤の中心的な定義上の特徴を顕在的な行動的対立 (overt behavioral opposition) であると考え、両立不可能な行動や不一致や対立という言葉で表現している。そして、彼らは、対人葛藤を行動的対立という顕在的葛藤に限定することの利点として、①存在するか存在しないか分からないようなネガティブな感情とは無関係に、不一致の事例が検討できる、②葛藤を競争や攻撃から区別することができる、③葛藤を影響や支配から区別することができる、という3点を挙げている。

日本人を対象として葛藤事例を検討した Ohbuchi & Takahashi (1994) は、日本人被験者の報告した葛藤事例の約半数において葛藤が潜在化されてしまい、採用される葛藤解決方略の大半が回避方略であることを明らかにした。この研究を受けて、日本人と英語圏からの外国人を対象にして同文化葛藤と異文化葛藤の解決方略を検討した大淵・菅原・Tyler・Lind (1995) は、多様な方略を用いた葛藤を被験者に報告させるため、顕在的葛藤に限定している。大淵他(1995)は、葛藤経験を「人と表立って対立した経験」と定義し、先の理由により、葛藤には不満に思っただけで表には出さない主観的・潜在的葛藤もあるとしつつも、表面化した顕在的葛藤のみを取り上げている。

対人葛藤解決方略の規定因を探る本研究では、Ohbuchi & Takahashi (1994) や大淵他(1995)の研究からの示唆を重視し、Laursen (1993)、Laursen & Collins (1994) および Selman et al. (1986) の定義に準じて、対人葛藤を顕在的葛藤に限定し、行動的対立と定義する。

## 2. 対人葛藤解決方略の規定因に関する先行研究

対人葛藤解決方略に関する研究は、藤森(2002)によれば、①解決方略の種類や構造に関する研究、②解決方略の使用を規定する要因に関する研究、③解決方略の使用がもたらす効果に関する研究、に分類される。

対人葛藤解決方略の問題に関しては、わが国でも次第に研究成果が蓄積されつつある。例えば、多目標理論の立場に立つ大淵・福島(1997)は、対人葛藤場面で当事者が使用する解決方略が目標

によって媒介されるかどうかを検討し、6種類の目標と4種類の方略（協調方略、対決方略、第三者方略、回避方略）の関係を解明した。すなわち、①協調方略の使用は関係目標によって促進されるが、同一性目標によって抑制される、②対決方略の使用はパワー・敵意目標と個人的資源目標によって促進される、③第三者方略の使用は関係目標によって促進される、④回避方略の使用は同一性目標によって促進されるが、個人的資源目標によって抑制される、ことが判明した。

同文化葛藤と異文化葛藤の解決方略を比較検討した大迫他（1995）は、7種類の解決方略（統合的方略、主張的方略、間接的方略、攻撃的方略、同調方略、回避方略、第三者介入方略）を用いた。その結果、日本人も英語圏からの外国人も、統合的方略、主張的方略、同調方略を使用することが多く、攻撃的方略を使用することが少ないことが示された。さらに、日本人は英語圏からの外国人に比べ、同文化葛藤では、主張的方略を使用することが多く、攻撃的方略を使用することが少ないが、異文化葛藤では、主張方略を使用することが多く、第三者介入方略を使用することが少ないことが分かった。

対人葛藤事態での対人感情と葛藤処理方略に及ぼす甘えの影響を検討した大迫・高橋（1994）は、研究Ⅱで甘え表出の強い者と弱い者の間に4種類の葛藤処理方略（他讓志向方略、自讓志向方略、方向探索方略、状況離脱志向方略）の使用に顕著な差異があり、いずれの解決方略の使用も甘え表出強群の方が弱群よりも多いことを見いだした。さらに、6種類の葛藤対象人物（父親、母親、親友、恋人、兄弟姉妹、大学教官）に対して使用する葛藤処理方略は、対象人物によって異なることも明らかにした。なお、大迫・高橋（1994）の用いた葛藤処理方略は、Ohbuchi & Baba（1988）が作成した方略であった。

### 3. 対人葛藤解決方略の規定因としての対人文脈要因

上述の大迫・高橋（1994）では、対人葛藤解決方略の使用に及ぼす葛藤対象人物の要因が検討されており、どのような人物との間で引き起こされた葛藤であるかによって、個人が使用する解決方略の種類・タイプが異なることが示唆された。葛藤対象人物、さらには個人と葛藤対象人物との関係の性質である対人葛藤当事者間の関係性を対人文脈と呼ぶ。

対人葛藤解決方略の選択・使用に及ぼす対人文脈の影響に関して、Laursen & Collins（1994）は社会的関係モデル（social relational model）の立場から以下のような説明をしている。

衡平理論によると、関係というものは、二つの当事者（個人あるいは集団）が継続的に社会的やりとり、つまり報酬の交換に従事することによって、成立するとされている。そして報酬のやりとりが長期にわたってなされるにつれて、その関係に親密さが生まれてくる。関係が親密になればなるほど、人はその関係から得られる報酬を従来どおりに維持することに重きを置くようになり、その関係への投資が促進される。すなわち親密な関係には、従来の報酬交換のやり方や得られる報酬の量を維持しようとする性質がある。親密な関係が持つこのような性質は、そこで行われる報酬交換の図式の急激な変化や打ち切りが起こることを抑制する働きを持つ。親密でない関係には、このような性質がないために、関係を維持しようとする働きが弱く、簡単に関係が打ち切られるのである。この様に関係の親密さは、方略選択を含む葛藤行動の多様性を生み出している。

しかし、親密さだけが葛藤行動の多様性に影響を与えているわけではない。親密な関係は、大きく二つに分けられる。一つは、親子関係や兄弟関係のように血縁や法によって半ば強制的に定められた閉鎖的關係 (closed relationship) である。もう一つは、恋人や親しい友人のように個人の自主的な参加によって作られる開放的關係 (open relationship) である。この二つの関係の違いは、関係の安定性、つまりその関係の崩壊のしやすさにある。個人の自主的な参加によって形成される開放的關係は流動的で崩壊しやすいが、閉鎖的關係は永続的なものであり崩壊しにくい。ゆえに、対人葛藤が起こったとき、開放的關係では崩壊を避けるために、互いの考えを尊重しながら関係を維持するタイプの方略が多く用いられる。逆に閉鎖的關係では、関係崩壊の危険性が低いため、どちらか一方の考えを押し通すタイプの方略が用いられる (Laursen & Collins, 1994, p.200)。以上のように、社会的関係モデルでは、関係の性質、つまり親密さと関係の安定性によって、方略の選択が規定されるとしている。

青年期の親密な仲間関係における対人葛藤解決方略の選択・使用の特徴を明らかにするために、Laursen (1993) は、メタ分析を通して対人文脈の違いが葛藤解決方略の選択・使用に及ぼす影響を検討した。①被験者の年齢が 12~21 歳であること、②行動的な対立を含むものであること、③二者関係における対人葛藤であること、④複数の二者関係を扱っていること、という 4 つの基準を満たす 12 の先行研究がメタ分析の対象となった。葛藤の相手は、親密な仲間 (恋人、親しい友人)、親 (父親と母親)、その他 (先生、クラスメートなど) の 3 カテゴリーに分類された。葛藤解決方略は、①主張 (power assertion)、②交渉 (negotiation)、③回避 (disengagement) の 3 カテゴリーが用いられた。主張とは、他方が服従するまで一方が自分の意見を押し通す方略のことである。交渉とは、両者の主張の間で折り合いを付けることによって、両者の主張を統合する方略のことである。回避とは、話題をすり変えるなどして、解決を見ることなく葛藤の継続を避ける方略のことである。分析結果から、親密な仲間関係では、主張や回避を避け、交渉が好まれ、逆に、親やその他の関係では主張が有力な方略として用いられていることが明らかになった。

また、Selman et al. (1986) の対人交渉方略モデルを用いた長峰 (1996) は、対人文脈 (親友、父親、母親) と被験者の年齢 (中学生、大学生) による方略の用い方の違いを検討した。対人交渉方略モデルは、4 つの社会情報处理的ステップ (第 1 ステップ: 問題の定義、第 2 ステップ: 代替方略の産出、第 3 ステップ: 方略の選択と実行、第 4 ステップ: 結果の評価) から構成される。このうち第 2 ステップの代替方略の産出では、思いつく限りの問題解決方略を挙げさせ、第 3 ステップの方略の選択と実行では、問題解決に最も良い方法である「最良の方略」を選択させ、さらに、問題解決の妨げが起こった場合にとる「障害後の方略」を選択させる。このように、対人葛藤を解決しようとする際の方略の継起を交渉過程と呼んでいる (長峰, 1999, p.99)。この対人交渉方略モデルでは、対人葛藤解決方略の種類・タイプに関心が寄せられているわけではなく、社会的視点調整能力に基づく 4 段階の発達レベル (レベル 0: 自己中心的で自他の視点が未分化な段階、レベル 1: 自他の視点は分化するが主観的な段階、レベル 2: 自己内省的に相手の立場に立つことで自他を互恵的に捉える段階、レベル 3: 第三者的視点から自他相互の目標のために視点を協調させる段階) のどのレベルに対人葛藤解決方略が評価されるかに関心が向けられている。また、対人葛藤解決方

略が相手を変えようとするのか（他者変化志向）、自分を変えようとするのか（自己変化志向）、自他を協調させようとするのか（協調的志向）、という3種類の対人志向性にも関心が寄せられている。そして、対人文脈による影響は、「最良の方略」ではみられず、「障害後の方略」でのみ認められると報告した。

長峰（1996）のデータに基づいて、方略選択における文脈の効果を別の角度から考察した長峰（1999）では、「最良の方略」と「障害後の方略」の二つの方略の継起を交渉過程とし、交渉過程パターンを、「一方向的变化」、「互恵性維持」、「互恵→一方向」、「一方向→互恵」の4つに分類した。その結果、友人あるいは父親に対しては「互恵性維持」が最も高いが、母親に対しては「互恵性維持」と「互恵→一方向」が同程度に最も高いことが判明した。

#### 4. 先行研究から示唆される検討課題

対人葛藤解決方略の選択・使用において対人文脈が果たす役割の重要性を指摘した Laursen & Collins (1994) の指摘どおり、対人葛藤解決方略の選択・使用に及ぼす要因を検討した Laursen (1993)、大淵・福島 (1997)、大淵他 (1995)、大迫・高橋 (1994) の研究においても、対人葛藤解決方略の継起である交渉過程に及ぼす要因を検討した長峰 (1996, 1999) の研究においても、対人文脈要因のもつ影響度が実証された。

ところで、Laursen (1993)、大淵・福島 (1997)、大淵他 (1995)、大迫・高橋 (1994) の研究では、対人葛藤解決方略の種類・タイプに関心を寄せつつ、1回限りの藤解決方略の選択・使用度に及ぼす対人文脈要因の影響が検討されている。すなわち、長峰 (1996, 1999) の研究で取り上げた交渉過程の1回目に選択・使用される「最良の方略」と呼ばれる方略の観点から、さまざまな方略の選択・使用度が検討されているが、その1回目の方略の選択・使用によって葛藤解決に失敗した場合に、2回目に選択・使用される「障害後の方略」と呼ばれる方略の検討は行われていない。これに対して、長峰 (1996, 1999) の研究では、「最良の方略」と「障害後の方略」の両方の対人葛藤方略の選択・使用に及ぼす対人文脈要因の影響が検討されているものの、選択・使用される解決方略の発達レベルと対人的志向性のみ関心が向けられており、選択・使用される解決方略の種類・タイプには関心が払われていない。

したがって、対人葛藤場面において交渉過程の視点（「最良の方略」と「障害後の方略」）を導入することによって、対人葛藤解決方略の種類・タイプの選択・使用に及ぼす対人文脈要因の影響を検討する必要があると考えられる。すなわち、1回目の対人葛藤解決方略（「最良の方略」）の選択・使用に及ぼす対人文脈要因の影響を検討すると同時に、何らかの障害が原因でその解決方略の選択・使用による葛藤解決が失敗に終わったとき、続いてとる2回目の対人葛藤解決方略（「障害後の方略」）の選択・使用に及ぼす対人文脈要因の影響を検討する必要がある。この第1回目の「最良の方略」と第2回目の「障害後の方略」を包括する要因名を、使用文脈要因と呼ぶことにする。本研究の第1の特徴は、さまざまなタイプの対人葛藤解決方略の選択・使用度に及ぼす対人文脈要因と使用文脈要因の影響を同時に検討するところにある。

対人文脈要因に関しては、対人関係における閉鎖的関係と開放的関係を強調した Laursen &

Collins (1994) の見解を参考にして、本研究では、対人関係の安定性の次元に注目し、対人文脈要因を設定したい。親密な対人関係であって、安定性のみが異なる対人関係として、長峰 (1996, 1999) と同様に親子関係と友人関係を設定する。すなわち、対人葛藤の相手は、父親、母親、同性の親友とする。

しかし、長峰 (1996, 1999) が設定した対人葛藤場面には次のような問題点が内在している。長峰 (1996, 1999) によると、親との葛藤は、子どもが一人で何かしようとする要求を親に規制される形であり、親による子どもの自主的行動の妨害という性質を有するが、友人との葛藤は、一緒に行う活動やクラブ活動場面での意見の相違といった形の葛藤であり、友人による共同行為の妨害という性質を有する。そこで、長峰 (1996, 1999) は、自主的行動の妨害の性質をもつ葛藤を親との葛藤場面に用い、共同行為の妨害の性質をもつ葛藤を友人との葛藤場面に用いた。葛藤対象人物によって異なる性質の葛藤を使用する方法は、特定の葛藤対象人物に関する典型的な性質の葛藤を取り上げるといった利点が存在することは明らかである。しかしながら、こうした方法には、葛藤対象人物によって異なるタイプの解決方略が選択・使用されたとしても、その真の原因が葛藤対象人物の違いにあるのか、それとも葛藤の性質の違いにあるのか、を判別することが不可能であるという決定的な弱点が内在する。すなわち、長峰 (1996, 1999) の方法は、対人文脈要因と葛藤の性質要因が交絡する方法であると指摘できる。厳密な実験計画を重視する立場をとる場合には、たとえ葛藤対象人物による葛藤の典型性が若干失われることがあるとしても、要因の交絡を排除し、全ての葛藤対象人物に関して同一の性質をもつ葛藤を取り上げねばならない。したがって、本研究では、対人文脈の違いにかかわらず、設定する葛藤の性質は自主的行動の妨害に統一する。

また、対人葛藤解決方略に関しては、Laursen (1993) がメタ分析で利用した主張方略、交渉方略、回避方略を基本的に採用したい。これら3つの方略タイプは、大淵・福島 (1997) が使用した4方略のうちに対決方略、協調方略、回避方略と一致する。しかし、長峰 (1996, 1999) の対人志向性という視点に立つと、3つの志向のうち他者変化志向は主張方略・対決方略に、協調的志向は交渉方略・協調方略に対応するが、自己変化志向に対応する方略が欠けている。長峰 (1996, 1999) の自己変化志向に対応する方略は、大淵他 (1995) の同調方略や大迫・高橋 (1994) の他譲志向方略中の唯一の逆転項目である謝罪であろう。したがって、本研究では、協調方略、対決方略、同調方略、回避方略の4方略を想定して、対人葛藤解決方略に関する項目を収集する。

なお、対人葛藤場面については、大淵・福島 (1997) や大淵他 (1995) では、過去の対人葛藤経験を想起させる方法が採用され、長峰 (1996, 1999) や大迫・高橋 (1994) では、仮想の対人葛藤場面を呈示する方法が採用されている。どちらの方法も長短あるが、本研究では仮想の対人葛藤場面を呈示する方法を採用する。

## 5. 本研究の目的

対人葛藤場面で大学生が選択・使用する対人葛藤解決方略の種類・タイプに及ぼす対人文脈要因（父親、母親、同性の親友）と使用文脈要因（最良の方略、障害後の方略）の影響を検討することが本研究の主目的である。

なお、対人葛藤解決方略としては、協調方略、対決方略、同調方略、回避方略の4方略を仮定する。また、対人葛藤は自主的行動の妨害という性質をもつ対人葛藤に統一し、仮想の対人葛藤場面を呈示する場面想定法を採用する。

## 方 法

### 1. 実験の概要、実験計画および被験者

#### (1) 実験の概要

「他者との日常的なイザコザに関する研究」という設定のもとに、被験者を実験室に誘導し、小冊子によって対人葛藤に関する仮想場面を被験者に呈示し、小冊子中の質問紙によって被験者の反応を測定した。実験は全て小冊子を用いて実施した。

#### (2) 実験計画

対人文脈（父親、母親、同性の親友）、使用文脈（最良の方略、障害後の方略）、被験者の性（男性、女性）、および方略タイプ（協調方略、対決方略、回避方略、同調方略）の4変数を独立変数とした。被験者の性は被験者間変数であり、そのほかの3変数は被験者内変数であった。なお、方略タイプ変数については、本研究で使用した対人葛藤解決方略の使用得点に関する因子分析の結果から、あとで方略タイプの数と名称を決定した。

#### (3) 被験者

被験者は大学生 76 名（18～24 歳、平均年齢 20.2 歳）であった。内訳は、男性 38 名（18～22 歳、平均年齢 20.1 歳）と女性 38 名（18～24 歳、平均 20.4 歳）であった。したがって、1 条件あたりの被験者数は 38 名であり、 $3 \times 2 \times 4 \times 2$  の 4 要因混合計画であった。

### 2. 実験手続きと実験材料

#### (1) 教示

口頭で「他者との日常的なイザコザに関する研究」であるという教示を被験者に与え、個別あるいは数名の小集団別に実験室に誘導した。実験室で、被験者に対して小冊子を手渡し、「イザコザ場面」を読んで、後の質問に回答するように求めた。

#### (2) 小冊子の構成

小冊子は、B5 版 12 ページであり、第 1～第 4 ページが父親とのイザコザ場面と質問、第 5～第 8 ページが母親とのイザコザ場面と質問、第 9～第 12 ページが同性の親友とのイザコザ場面と質問であった。なお、小冊子は男性用と女性用の 2 種類を用意したが、これらの違いは、同性の親友とのイザコザ場面で登場する同性の親友の名前を男性名あるいは女性名とした点が異なるだけであった。

#### (3) 葛藤場面

「下に書いてあるのは、あなたとあなたの「父親」とのイザコザ場面です。あなたがこのような場面にであったと仮定して、読んでください。その後、質問にお答えください。」という導入文に続

いて、父親との葛藤場面を呈示した。父親あるいは母親との葛藤場面は、長峰（1996, 1999）の使用した自主的行動の妨害という性質をもつ仮想葛藤場面を一部修正して利用し、同性の親友との葛藤場面は、長峰（1996, 1999）の使用した共同行動の妨害という性質の葛藤を自主的行動の妨害という性質の葛藤に変更し、新たな仮想葛藤場面を作成した（表1参照）。

(4) 葛藤場面での反応測定質問

「先ほど読んでいただいたイザコザ場面の相手（父親）に対して、あなたはどのように思われますか。次の各項目について「全くそう思わない」～「全くそう思う」、もしくは、「全くない」～「ある」までの4段階のうち、あなたの意見に当てはまるところに○を付けてお答えください。」という導入文に続いて、行動妨害意識、親密感情、関係安定性認知を測定した。

行動妨害意識は、本研究の対人葛藤場面の設定が妥当であったかどうかを検討する際に利用する測度である。親密感情と関係安定性認知は、本研究で操作する対人文脈要因に関する実験操作が妥当であったかどうかを判断するための測度である。

**行動妨害意識:**「あなたのプライベートな行動があなたの父親から制限されたと思いますか?」という1項目の質問によって、父親との対人葛藤が自分の行動の妨害となっているかどうかを測定した。回答は、そう思う（4点）～全くそう思わない（1点）の4段階で得点化し、行動妨害意識得点とした。高得点ほど行動妨害意識が高い。

**親密感情:**「あなたは、あなたの父親をどう思いますか?」という質問によって、「親しみを感じる」「信頼感を感じる」「好感が持てる」の3項目に関して回答を求めた。回答は、そう思う（4点）～全くそう思わない（1点）の4段階で得点化した。3項目間に非常に高い内的整合性が認められたため（ $\alpha=.95$ ）、3項目の平均得点を親密感情得点とした。高得点ほど親密感情が高い。

**関係安定性認知:**「あなたが自分の思いどおりに行動した場合、父親との関係はどのなると思いま

表1 本研究で呈示した仮想の対人葛藤場面

|         |  |
|---------|--|
| 父親場面    | あなたは、今度の休日に、親しい友人達と日帰り旅行に行くことになりました。その遊びの計画では、家に戻るのが夜の12時になっています。あなたは、その旅行にぜひ行きたいと思いましたが、あなたの父親は、家に帰るのが夜の11時を過ぎるのはダメであると日頃から言っているのを知っていました。 <u>この計画を知った父親は反対しました。</u>                  |
| 母親場面    | ある日、あなたは、あなたの大好きなアーティストのライブのチケットを手に入れました。あなたは、ずっと前からそのアーティストのライブに絶対行きたいと思っていましたが、ライブのある日はちょうど、家に数名の親戚が来るために、あなたの母親は、その手伝いをしてもらいたかったので、あなたに家にいてほしいと言っていました。 <u>ライブのことを知った母親は反対しました。</u> |
| 同性の親友場面 | あなたは、次の日曜日は何の予定もありませんでした。ある時、新しくサークルに入ってきた子に、次の日曜日に映画を見に行こうと誘われました。ヒマだったので、あなたは一緒に行く約束をしました。しかし、そのことが同じサークルの親しい友人であるジュンコ(マサル)に伝わりました。ジュンコ(マサル)は、新入りの子に好意を持っておらず、反対しました。                |

(注1) 同性の親友場面は女性用で、( )内が男性用。

(注2) 父親場面と母親場面の下線部は、本研究で追加した部分。同性の親友場面は本研究で作成。



すか？」という質問によって、「今までと変わらない可能性」「関係が気まづくなる可能性」「関係が終わってしまう可能性」の3項目に関して尋ねた。最初の項目については、ある(4点)～全くない(1点)の4段階で得点化し、あとの2項目については、全くない(4点)～ある(1点)の4段階で得点化した。3項目間に内的整合性が認められたため( $\alpha=.70$ )、3項目の平均得点を関係安定性認知得点とした。高得点ほど関係安定性認知が高い。

母親との葛藤場面あるいは同性の親友との葛藤場面では、上記の父親という用語が母親あるいは同性の親友に変わるだけである。

#### (5) 対人葛藤解決方略

対人葛藤解決方略は、大淵・福島(1997)が使用した4つの方略のうち第三者介入方略を除く協調方略(4項目)、対決方略(4項目)、回避方略を利用する。ただし、大淵・福島(1997)では回避方略が1項目であったので、話題切替と退避の2項目を追加して3項目とした。そして、同調方略に関しては、服従、謝罪、あきらめの3項目を用意した(表2参照)。

最良の方略:「先ほど読んでいただいた父親とのイザコザ場面に、もしあなたがであわれたらどうされますか。次のそれぞれの方法について、「全くそう思わない」～「そう思う」までの4段階のうち、あなたの意見に当てはまるところに○を付けてお答えください。」という質問文によって、表2

表2 本研究で用いた対人葛藤解決方略の概念とその具体的な項目

---

協調: 自他双方の利害を調整したり、相手の変化を穏やかに促すこと

- ・ 穏やかに、辛抱強く、相手を説得する。
- ・ 交換条件や妥協案を出して、相手と交渉する。
- ・ 自分の期待を間接的に相手に伝える。
- ・ 相手の怒りや不安を鎮める。

対決: 一方的に自己を主張したり、攻撃すること

- ・ 自分の立場を強く主張する。
- ・ 相手を強制して、何かをやらせる。
- ・ 相手に対して怒りを表現する。
- ・ 相手を批判する。

回避: 対立を避ける

- ・ いったん対立を避け、別の機会を探る。
- ・ とりあえず話題を変えてみる。(話題切換)
- ・ とにかくその場を離れる。(退避)

同調: 相手の言いなりになる

- ・ 我慢して、相手に従う。(服従)
- ・ とりあえず謝る。(謝罪)
- ・ 今回はあきらめる。(あきらめ)

---

(注) ( )で説明付きの項目以外は、大淵・福島(1997)の対人葛藤解決方略である。

に示した 14 項目の方略をどの程度使用するかを尋ねた。回答は、そう思う（4 点）～全くそう思わない（1 点）の 4 段階で得点化した。高得点ほど方略の選択・使用度が高い。

**障害後の方略**：「あなたはイザコザの解決を試みました。しかし、あなたの父親はそれに応じませんでした。」「このような場合、あなたはどうかされますか。次のそれぞれの方法について「全くそう思わない」～「そう思う」までの 4 段階のうち、あなたの意見に当てはまるところに○を付けてお答えください。」という質問文によって、「最良の方略」の場合と全く同様に、表 2 に示した 14 方略の使用度を尋ねた。

なお、母親あるいは同性の親友の場合の解決方略の測定は、上記の父親という用語を母親あるいは同性の親友という用語に置き換えて行った。

## 結 果

### 1. 実験操作の検討

対人文脈別・被験者の性別に行動妨害意識得点、親密感情得点、関係安定性認知得点の平均と標準偏差を表 3 に示す。

#### (1) 行動妨害意識

行動妨害意識得点に関する対人文脈要因（3）×被験者の性要因（2）の 2 要因分散分析を行ったが、これらの要因の有意な効果は得られなかった。各実験条件の行動妨害意識得点の平均は、いずれも 3 点を超えていることから、本研究で設定した対人葛藤場面が被験者に強い対人葛藤を生じさせたと解釈できる。しかも、本研究の対人葛藤場面は、実験条件の違いにもかかわらず、同程度の対人葛藤を生じさせることに成功していた。したがって、本研究における対人葛藤場面の設定は、非常に適切であったといえる。

#### (2) 親密感情

親密感情得点に関する上記と同様の 2 要因分散分析を行ったところ、対人文脈要因の主効果のみが有意 ( $F(2,148)=22.61, p<.001$ ) であった。多重比較の結果（有意水準を 5% に設定。以下同様）、親密度得点は、同性の親友、母親、父親の順に高く、3 つの条件間で相互に全て有意差が認められた。父親に対する親密感情得点の平均が 3 点をいくらか下回ったものの、親友と母親に対する親密

表 3 行動妨害意識、親密感情、および関係安定性認知

| 条件      | 父親             |                | 母親             |                | 同性の親友          |                |
|---------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
|         | 男性             | 女性             | 男性             | 女性             | 男性             | 女性             |
| 行動妨害意識  | 3.39<br>(0.68) | 3.39<br>(0.64) | 3.37<br>(0.75) | 3.34<br>(0.75) | 3.11<br>(0.86) | 3.24<br>(0.75) |
| 親密感情    | 2.85<br>(0.69) | 2.89<br>(0.92) | 3.04<br>(0.87) | 3.30<br>(0.87) | 3.32<br>(0.67) | 3.46<br>(0.90) |
| 関係安定性認知 | 3.23<br>(0.47) | 3.17<br>(0.59) | 3.40<br>(0.36) | 3.33<br>(0.56) | 2.96<br>(0.65) | 2.82<br>(0.57) |

(注) 表内の数値は平均と（標準偏差）

感情得点の平均がどの条件でも3点以上であったことから、親密な対人関係に絞ることを意図した本研究における対人文脈要因の操作はおおむね有効であったといえる。

### (3) 関係安定性認知

関係安定性認知得点に関する2要因分散分析の結果、対人文脈要因の主効果のみが有意( $F(2,148)=21.90, p<.001$ )であった。多重比較の結果、関係安定性認知得点は、母親、父親、同性の親友の順に高く、3つの条件間で相互に全て有意差が認められた。母親と父親に対する関係安定性認知得点の平均は3点を超えているのに対し、同性の親友に対する関係安定性認知得点の平均は3点を割っており、相対的ではあるが、両親の方が同性の友人よりも対人関係がより安定していると被験者は認知していることが確認できた。したがって、本研究における対人文脈要因の操作は、一応成功したと考えられる。

## 2. 対人葛藤解決方略のタイプ

予め用意した14項目の対人葛藤解決方略項目の得点に関して、最尤法に引き続いてKaiserの正規化を伴わないバリマックス法による因子分析を行った。その際、各項目の得点には、対人文脈別・使用文脈別の6種類の得点の平均を利用した。そして分析の結果、4因子が抽出されたが、各因子に属する項目のうちから、因子負荷量が.40未満の項目と別の因子に対する負荷量との差が.10未満の項目を3項目削除し、11項目を残した。この11項目に関して、再度同様の方法で因子分析を行った結果を表4に示した。

各因子に含まれる項目の意味内容から、第1因子は回避方略因子(3項目)、第2因子は同調方略因子(2項目)、第3因子は対決方略因子(3項目)、第4因子は協調方略因子(3項目)と命名した。各因子の属する項目の内的整合性は、回避方略因子で $\alpha=.81$ 、同調方略因子で $\alpha=.91$ 、対決方略因子で $\alpha=.75$ 、協調方略因子で $\alpha=.61$ であり、協調方略因子の $\alpha$ 係数が若干低いものの、ある程度の内的整合性が認められた。なお、11項目の尺度全体の内的整合性は $\alpha=.63$ であった。そこで、それぞれの因子に属する項目得点の平均をその方略因子の得点とした。得点が高いほど、その方略の

表4 対人葛藤解決方略に関する因子分析の結果

|                      | 第1因子<br>回避 | 第2因子<br>同調 | 第3因子<br>対決 | 第4因子<br>協調 | 共通性 |
|----------------------|------------|------------|------------|------------|-----|
| とりあえず話題を変えてみる        | .83        | .03        | .20        | .12        | .75 |
| いったん対立を避け、別の機会を探る    | .77        | .09        | -.13       | .24        | .67 |
| とにかくその場を離れる          | .74        | .18        | .14        | -.25       | .74 |
| 今回はあきらめる             | .12        | .98        | -.04       | -.06       | .74 |
| 我慢して、相手に従う           | .14        | .84        | -.16       | .03        | .74 |
| 相手に対して、怒りを表現する       | .06        | -.02       | .88        | -.02       | .74 |
| 相手を批判する              | .06        | -.03       | .81        | -.11       | .74 |
| 自分の立場を強く主張する         | .07        | -.21       | .47        | .22        | .32 |
| 穏やかに、辛抱強く、相手を説得する    | -.20       | -.03       | -.01       | .84        | .74 |
| 相手の怒りや不安を静める         | .09        | -.09       | .00        | .50        | .74 |
| 交換条件や妥協案を出して、相手と交渉する | .28        | .17        | .04        | .47        | .33 |
| 累積因子寄与率(%)           | 18.17      | 34.31      | 50.34      | 62.88      |     |

使用可能性が高い。

### 3. 対人葛藤解決方略の使用可能性の規定因

#### (1) 分析結果の概要

実験条件別の対人葛藤解決方略得点の平均と標準偏差を表5に示す。対人葛藤解決方略得点に関する対人文脈(3)×使用文脈(2)×被験者の性(2)×方略タイプ(4)の4要因分散分析を行ったところ、対人文脈要因の主効果( $F(2,148)=6.25, p<.01$ )、使用文脈要因の主効果( $F(1,74)=25.42, p<.001$ )、被験者の性要因の主効果( $F(1,74)=16.56, p<.001$ )、方略タイプ要因の主効果( $F(3,222)=63.96, p<.001$ )がそれぞれ有意であった。また、対人文脈要因と使用文脈要因の交互作用( $F(2,148)=3.58, p<.05$ )、対人文脈要因と方略タイプ要因の交互作用( $F(6,444)=8.73, p<.001$ )、使用文脈要因と方略タイプ要因の交互作用( $F(3,222)=7.57, p<.001$ )、対人文脈要因と被験者の性要因と方略タイプ要因の交互作用( $F(6,444)=2.18, p<.05$ )が有意であった。なお、以下で実施する主効果の多重比較、単純主効果の検定と多重比較、単純交互作用の検定、単純単純主効果の検定と多重比較、などの下位検定は、有意水準を全て5%に設定したので、検定結果の詳細な記述を省略する。

#### (2) 対人文脈、使用文脈、被験者の性、方略タイプの主効果

対人文脈要因の主効果が有意であったので、多重比較を行ったところ、方略得点は、父親( $M=2.51$ )の場合の方が親友( $M=2.37$ )の場合よりも有意に大きかった。大学生は、同性の親友との葛藤よりも父親との葛藤の方でより多く解決方略を使用する可能性がある。母親( $M=2.44$ )との葛藤の場合には、その中間の数の解決方略を使用する可能性がある。

使用文脈要因の有意な主効果から、方略得点は、障害後の方略( $M=2.50$ )の方が最良の方略( $M=2.38$ )よりも有意に大きいことが分かった。大学生は、対人葛藤場面では、1回目の解決方略の使用によって葛藤が解決しない場合には、2回目には1回目よりも多くの解決方略を使用する可能性がある。

表5 実験条件別の対人葛藤解決方略の使用可能性

|       |    | 最良の方略          |                |                |                | 障害後の方略         |                |                |                |
|-------|----|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
|       |    | 協調             | 対決             | 回避             | 同調             | 協調             | 対決             | 回避             | 同調             |
| 父親    | 男性 | 2.90<br>(0.50) | 2.56<br>(0.64) | 2.08<br>(0.76) | 1.63<br>(0.59) | 2.76<br>(0.67) | 2.74<br>(0.72) | 2.18<br>(0.69) | 2.00<br>(0.85) |
|       | 女性 | 2.88<br>(0.58) | 2.87<br>(0.66) | 2.48<br>(0.54) | 2.07<br>(0.87) | 2.83<br>(0.65) | 3.04<br>(0.79) | 2.68<br>(0.70) | 2.39<br>(0.87) |
| 母親    | 男性 | 3.04<br>(0.55) | 2.59<br>(0.67) | 1.81<br>(0.61) | 1.47<br>(0.60) | 3.10<br>(0.65) | 2.69<br>(0.87) | 2.06<br>(0.77) | 1.72<br>(0.79) |
|       | 女性 | 3.20<br>(0.54) | 2.64<br>(0.85) | 2.30<br>(0.65) | 1.87<br>(0.77) | 3.17<br>(0.60) | 2.87<br>(0.92) | 2.44<br>(0.89) | 2.01<br>(1.00) |
| 同性の親友 | 男性 | 2.68<br>(0.63) | 2.42<br>(0.73) | 2.38<br>(0.79) | 1.58<br>(0.72) | 2.62<br>(0.69) | 2.57<br>(0.93) | 2.32<br>(0.73) | 1.68<br>(0.79) |
|       | 女性 | 3.05<br>(0.67) | 2.19<br>(0.58) | 2.60<br>(0.61) | 1.83<br>(0.67) | 3.03<br>(0.74) | 2.31<br>(0.59) | 2.72<br>(0.77) | 1.96<br>(0.89) |

(注) 表内の数値は平均と(標準偏差)

被験者の性要因の主効果から、方略得点は、女性 ( $M=2.56$ ) の方が男性 ( $M=2.32$ ) よりも高いことが示された。対人葛藤に直面した場合、女子大学生は男子大学生よりも多くの葛藤解決方略を使用する可能性がある。

方略タイプ要因の主効果が有意であったので、多重比較を行ったところ、方略得点は、協調方略 ( $M=2.94$ )、対決方略 ( $M=2.62$ )、回避方略 ( $M=2.34$ )、同調方略 ( $M=1.85$ ) の順に大きく、これら全ての方略間で相互に有意差が存在した。対人葛藤を解決するために大学生が最も多く使用する可能性のある方略は協調方略であり、対決方略が次に多く使用され、そして回避方略が3番目に使用され、最も使用する可能性の少ない方略は同調方略である。

### (3) 対人文脈と使用文脈の交互作用

対人文脈要因と使用文脈要因の交互作用について、単純主効果の検定を行ったところ、対人文脈要因の単純主効果は、障害後の方略条件では有意であったが、最良の方略条件では有意でなかった。すなわち、障害後の方略条件では、多重比較の結果、父親 ( $M=2.58$ ) や母親 ( $M=2.51$ ) との葛藤の場合の方が同性の親友 ( $M=2.40$ ) との葛藤の場合よりも、全体的に使用する可能性のある解決方略は多かった。しかし、最良の方略では、葛藤の相手によるそうした差異は見られなかった。

また、使用文脈要因の単純主効果は、父親条件と母親条件では有意であったが、同性の親友条件では有意でなかった。すなわち、父親や母親との葛藤の場合には、障害後の方略 ( $M=2.58, M=2.51$ ) の方が最良の方略 ( $M=2.43, M=2.37$ ) よりも多く使用される可能性がある。しかし、同性の親友との葛藤の場合には、使用文脈によるそうした差異は見られなかった。

### (4) 対人文脈と方略タイプの交互作用

対人文脈要因と方略タイプ要因の交互作用について、単純主効果の検定を行ったところ、対人文脈要因の単純主効果は、4つの方略の全てにおいて有意であった。すなわち、協調方略の使用可能性は、母親条件 ( $M=3.13$ ) の方が父親条件 ( $M=2.84$ ) や同性の親友条件 ( $M=2.85$ ) よりも高く、対決方略の使用可能性は、父親条件 ( $M=2.80$ ) や母親条件 ( $M=2.70$ ) の方が同性の親友条件 ( $M=2.37$ ) よりも高く、回避方略の使用可能性は、同性の親友条件 ( $M=2.50$ ) と父親条件 ( $M=2.36$ ) の方が母親条件 ( $M=2.15$ ) よりも高く、同調方略の使用可能性は、父親条件 ( $M=2.02$ ) の方が母親条件 ( $M=1.77$ ) や同性の親友条件 ( $M=1.76$ ) よりも高かった。

また、方略タイプ要因の単純主効果は、3つの対人文脈条件の全てにおいて有意であった。多重比較の結果、父親条件での使用可能性は、協調方略 ( $M=2.84$ ) と対決方略 ( $M=2.80$ ) が最も高く、次に回避方略 ( $M=2.36$ ) が高く、同調方略 ( $M=2.02$ ) が最も低かった。母親条件での使用可能性は、協調方略 ( $M=3.13$ )、対決方略 ( $M=2.70$ )、回避方略 ( $M=2.15$ )、同調方略 ( $M=1.77$ ) の順に高かった。同性の親友条件での使用可能性は、協調方略 ( $M=2.85$ ) が最も高く、次に対決方略 ( $M=2.37$ ) と回避方略 ( $M=2.50$ ) が高く、同調方略 ( $M=1.76$ ) が最も低かった。

### (5) 使用文脈と方略タイプの交互作用

使用文脈要因と方略タイプ要因の交互作用について、単純主効果の検定を行ったところ、使用文脈要因の単純主効果は、協調方略を除く3つの方略で有意であった。すなわち、対決方略、回避方略、同調方略の使用可能性は、障害後の方略 ( $M=2.70, M=2.40, M=1.96$ ) の方が最良の方略 ( $M=2.55$ ,

$M=2.27$ ,  $M=1.74$ ) よりも高かったが、協調方略の使用可能性にはそうした使用文脈条件 ( $M=2.96$ ,  $M=2.92$ ) による差異がみられなかった。

また、方略タイプ要因の単純主効果は、2つの使用文脈条件の両方において有意であった。多重比較の結果、最良の方略としての使用可能性も、障害後の方略としての使用可能性も、協調方略、対決方略、回避方略、同調方略の順に高かった。

#### (6) 対人文脈と被験者の性と方略タイプの交互作用

##### 単純交互作用の概要

対人文脈要因と被験者の性要因と方略タイプ要因の交互作用を検討するために、単純交互作用の検定を行った。その結果、対人文脈要因と被験者の性要因の単純交互作用は、対決方略条件では有意であったが、そのほかの3つの方略条件では有意でなかった。また、被験者の性要因と方略タイプ要因の単純交互作用は、同性の親友条件では有意であったが、そのほかの対人文脈条件では有意でなかった。さらに、対人文脈要因と方略タイプ要因の単純交互作用は被験者が男性の場合と女性の場合の両方で有意であった。

##### 対人文脈と被験者の性の単純交互作用

方略タイプが対決方略の場合に、対人文脈要因と被験者の性要因の単純交互作用が有意であったので、単純単純主効果の検定を実施した。対決方略得点に関する対人文脈要因の単純単純主効果は、女性では有意であったが、男性では見られなかった。多重比較の結果、女性は、同性の親友 ( $M=2.25$ ) が相手の場合の方が父親 ( $M=2.96$ ) や母親 ( $M=2.75$ ) が相手の場合よりも対決方略を少なく使用する可能性のあることが分かった。しかし、男性は、相手によって対決方略の使用可能性に違いは見られない。

また、対決方略得点に関する被験者の性要因の単純単純主効果は、父親条件で有意であり、女性 ( $M=2.96$ ) の方が男性 ( $M=2.65$ ) よりも対決方略の使用可能性が高かった。しかし、被験者の性要因の単純単純主効果は、母親条件と同性の親友条件では見られなかった。

##### 被験者の性と方略タイプの単純交互作用

対人文脈が同性の親友の場合に、被験者の性要因と方略タイプ要因の単純交互作用が有意であったので、上と同様の単純単純主効果の検定を実施した。同性の親友の場合における方略得点に関する被験者の性要因の単純単純主効果は、協調方略と回避方略で有意であったが、対決方略と同調方略では有意でなかった。すなわち、同性の親友に対して、女性は男性よりも、協調方略 ( $M=3.04$  vs.  $M=2.65$ ) と回避方略 ( $M=2.66$  vs.  $M=2.35$ ) を使用する可能性が高い。しかし、対決方略と同調方略の使用可能性には、そうした性差は認められない。

また、相手が同性の親友の場合、方略タイプの単純単純主効果は、男性と女性の両方で有意であった。すなわち、男性は、協調方略 ( $M=2.65$ ) と対決方略 ( $M=2.50$ ) と回避方略 ( $M=2.35$ ) を同じ程度に使用し、同調方略 ( $M=1.65$ ) の使用が少ない。これに対して、女性は、同性の親友に対して、協調方略 ( $M=3.04$ ) を最もよく使用し、次に回避方略 ( $M=2.66$ ) を多く使用し、3番目に対決方略 ( $M=2.25$ ) を使用し、同調方略 ( $M=1.89$ ) を最も使用しない。

##### 対人文脈と方略タイプの単純交互作用

被験者が男性の場合における対人文脈要因と方略タイプ要因の単純交互作用に関して、対人文脈要因の単純単純主効果は、協調方略と回避方略で有意であったが、対決方略と同調方略では有意でなかった。多重比較の結果、男性は、母親 ( $M=3.07$ ) に対しての方が同性の親友 ( $M=2.65$ ) に対してよりも協調方略を使用する可能性が高い。男性が使用する回避方略には特定の対人文脈条件間に有意差は存在しなかった。

男性の場合、方略タイプ要因の単純単純主効果は、3つの対人文脈条件の全てにおいて有意であった。多重比較の結果、父親に対して男性は、協調方略 ( $M=2.83$ ) と対決方略 ( $M=2.65$ ) を使う可能性が高く、回避方略 ( $M=2.13$ ) と同調方略 ( $M=1.82$ ) を使う可能性が低い。ところが、母親に対して男性は、協調方略 ( $M=3.07$ ) を使う可能性が最も高く、対決方略 ( $M=2.64$ ) を使う可能性が次に高く、回避方略 ( $M=1.93$ ) と同調方略 ( $M=1.60$ ) を使う可能性が低い。さらに、同性の親友に対して男性は、協調方略 ( $M=2.65$ )、回避方略 ( $M=2.50$ )、対決方略 ( $M=2.35$ )、の3つの方略を使う可能性に比べて、同調方略 ( $M=1.63$ ) を使う可能性が低い。

被験者が女性の場合における対人文脈要因と方略タイプ要因の単純交互作用に関して、対人文脈要因の単純単純主効果は、協調方略、対決方略、同調方略で有意であったが、回避方略では有意でなかった。多重比較の結果、女性は、同性の親友 ( $M=2.25$ ) に対しての方が父親 ( $M=2.96$ ) や母親 ( $M=2.75$ ) に対してよりも対決方略を使用する可能性が低く、父親 ( $M=2.23$ ) に対しての方が母親 ( $M=1.94$ ) や同性の親友 ( $M=1.89$ ) に対してよりも同調方略を使用する可能性が高い。女性が使用する協調方略には特定の対人文脈条件間に有意差は存在しなかった。

女性の場合、方略タイプ要因の単純単純主効果は、3つの対人文脈条件の全てにおいて有意であった。多重比較の結果、父親に対して女性は、協調方略 ( $M=2.86$ ) と対決方略 ( $M=2.96$ ) を使う可能性が高く、同調方略 ( $M=2.23$ ) を使う可能性が低い。回避方略 ( $M=2.58$ ) を使う可能性はその中間である。ところが、母親に対して女性は、協調方略 ( $M=3.18$ )、対決方略 ( $M=2.75$ )、回避方略 ( $M=2.37$ )、同調方略 ( $M=1.94$ ) の順に使用する可能性が高く、4つの方略間にはそれぞれ有意差が存在する。さらに、同性の親友に対して女性は、協調方略 ( $M=3.04$ )、回避方略 ( $M=2.66$ )、対決方略 ( $M=2.25$ )、同調方略 ( $M=1.89$ ) の順に使用する可能性が高く、4つの方略間にはそれぞれ有意差が存在する。

## 考 察

### 1. 本研究の実験操作の有効性

本研究では、大学生の自主的行動が他者によって妨害される場면을対人葛藤場面として設定した。行動妨害意識に関する結果は、父親・母親・同性の親友という葛藤対象人物の違いを超えて、本研究で設定した対人葛藤場面が大学生に強い葛藤を引き起こしたことを示している。このことから、本研究で使用した仮想対人葛藤場面は対人葛藤を生じさせるのに適切な場面であったといえる。

親密感情に関する結果から、大学生は、同性の親友、母親、父親の順に親密感情を強く抱いていることが分かった。父親に対する親密感情が低いものの、本研究で取り上げた葛藤対象人物は、大学生にとっておおむね親密な人物であったといえよう。

そして、対人関係の安定性認知に関する結果から、大学生は、母親、父親、同性の親友の順に関係の安定性を強く認知していることが判明した。これらの結果は、対人関係の閉鎖性－開放性に関する Laursen & Collins (1994) の見解と一致する。

以上のことから、本研究における対人葛藤場面の設定と対人葛藤対象人物(対人文脈)の設定は、いずれも有効であったと解釈できる。

## 2. 対人葛藤解決方略の使用の概要

対人葛藤の解決に大学生が使用する方略は、仮定したとおり、協調方略、対決方略、回避方略、同調方略の4タイプに分類できることが確認された。そして、これら4タイプの解決方略の使用可能性に関する分析結果から、大学生は、協調方略を最もよく使用し、対決方略を次によく使用し、さらに回避方略の使用へと続き、同調方略を最も使用しないことが実証された。

これら4タイプの対人葛藤解決方略の全体的な使用に関する結果から次のようなことが明らかとなった。同じ対人葛藤に直面した場合でも、解決方略の全体的使用度には性差が存在し、女性の方が男性よりも解決方略の全体的使用度は高かった。対人葛藤を解決するために、男子大学生に比べて、女子大学生はより多くの解決方略を使う可能性がある。

また、対人葛藤の相手が父親の場合の方が同性の親友の場合よりも、解決方略の全体的使用度が高かった(母親の場合は両者の中間)。葛藤対象人物に対する親密感情の程度が使用する解決方略の多少と関係しているのかもしれない。

さらに、2回目の方略使用(障害後の方略)の方が1回目の方略使用(最良の方略)の場合よりも、解決方略の全体的使用度が高かった。1回目の解決方略の使用によって対人葛藤が解決しない場合に、大学生は解決をあきらめるのではなく、次の2回目にはより多くの解決方略を使用する可能性がある。

## 3. 対人葛藤解決方略の使用可能性に及ぼす対人文脈の影響

対人葛藤解決方略の全体的使用可能性は、父親との葛藤の場合に最も高く、同性の親友の場合に最も低く、母親の場合がその中間であった。しかし、個々の解決方略の使用可能性は、対人文脈によって複雑に異なることが、対人文脈要因と方略タイプ要因の交互作用から明らかとなった。

個々の方略の使用可能性に関する対人文脈間の差異に注目すると、以下の4点が指摘できる。①協調方略は、母親に対して最も多く使用するが、②回避方略は母親に対して最も少なく使用する。③同調方略は、父親に対して最も多く使用する。④対決方略は、同性の親友に対して最も少なく使用する。このように、4つの方略タイプは、それぞれ対人文脈によって使用される程度が異なる。親密感情が中間で、対人関係が最も安定しているとみなす母親に対して、回避方略が少なく使われるのは理解できるが、協調方略が多く使われることは解釈しにくい。これに対して、親密感情が低くて、関係安定性が中間の父親に対して、同調方略が多く使われることは納得できる。また、最も親密感情が高いのに関係安定性が最も低い同性の親友に対して、対決方略が少なく使われることは十分に説明できる。



個々の方略の使用可能性に関する対人文脈間の類似性に注目すると、以下の3点が指摘できる。①協調方略を少なく使用する点と回避方略を多く使用する点で、父親の場合と同性の親友の場合が類似している。②対決方略を多く使用する点で、父親の場合と母親の場合が類似している。③同調方略を少なく使用する点で、母親の場合と同性の親友の場合が類似している。②は対人関係の安定性の高さから、③は親密感情の高さから説明可能であるが、①は解釈が困難である。

対人文脈別に使用される解決方略タイプの順位から、別の側面が見えてくる。解決方略の使用は、協調方略、対決方略、回避方略、同調方略の順に多く、葛藤の相手が誰であっても、協調方略が最も多く使用され、同調方略が最も少なく使用される点は共通している。しかし、使用される解決方略は、対人文脈によって微妙に異なることが解明された。すなわち、①相手が父親の場合は、協調方略と対決方略が同程度に最も多く使用され、回避方略が3番目に多く使用された。②相手が母親の場合は、対決方略が2番目に多く使用され、回避方略が3番目に多く使用された。③相手が同性の親友の場合は、対決方略と回避方略が同程度に2番目に多く使用されていた。このように、対人葛藤に直面した大学生は、協調方略を最も多く使用し、同調方略を最も少なく使用するものの、父親との葛藤では対決方略の使用が顕著に多くなり、同性の親友との葛藤では回避方略の使用が相対的に多くなる点が特徴的である。

以上の対人文脈による解決方略タイプの使用可能性の差異は、解決方略の使用者である大学生の性が絡むことによって一層複雑になることが、対人文脈要因と被験者の性要因と方略タイプ要因の交互作用から明らかとなった。すなわち、①協調方略を母親に対して最も多く使用する現象はかなり不明瞭になっている。男子大学生では、母親と父親との間の有意差が消失し、母親と同性の親友との間の有意差のみが残っている。女子大学生では、母親と父親あるいは同性の親友との間に差はあるものの、有意差は認められない。②回避方略を母親に対して最も少なく使用する傾向は、男子大学生に見られるものの、有意差は消失している。女子大学生ではそうした傾向は全く認められない。③同調方略を父親に対して最も多く使用する現象は、女子大学生だけに見られ、男子大学生では全く見られない。④対決方略を同性の親友に対して最も少なく使用する現象は、女子大学生にのみ見られ、男子大学生では全く見られない。

このように、対人葛藤解決方略に及ぼす対人文脈の影響を検討する際には、方略使用者の性要因を考慮する必要のあることが示唆される。

#### 4. 対人葛藤解決方略の使用可能性に及ぼす使用文脈の影響

対人葛藤解決方略の全体的使用可能性は、1回目の最良の方略よりも2回目の障害後の方略の方が高いことが判明したが、こうした傾向は対人文脈によって異なることが、対人文脈要因と使用文脈要因の交互作用から示された。すなわち、障害後の方略の使用可能性の方が最良の方略の使用可能性よりも高いという現象は、父親との葛藤の場合と母親との葛藤の場合に生じており、同性の親友との葛藤の場合には生じていない。また、最良の方略の使用可能性は対人文脈による差異が見られないが、障害後の方略の使用可能性は、父親と母親に対する場合の方が同性の親友に対する場合よりも高いことが明らかとなった。

葛藤解決の失敗は、開放的対人関係の場合には、さらなる方略使用を増加させないが、閉鎖的対人関係の場合には、さらなる方略使用を促進することが分かった。

使用文脈要因と方略タイプ要因の交互作用から、対決方略、回避方略、同調方略の3方略は、1回目の方略使用の失敗によって2回目の使用可能性が増加するが、協調方略はそうした使用可能性の増加を示さないことが分かった。

#### 4. 今後の課題

本研究では、葛藤の当事者の一方を大学生とし、大学生が使用する葛藤解決方略の特徴を、葛藤相手（対人文脈）の要因と方略使用の失敗をはさんでの再度の方略使用（使用文脈）の要因を中心に検討してきた。解決方略使用者の年齢段階を大学生以外に広げること、多様な対人葛藤の対象人物との葛藤の解決方略を検討すること、解決方略のタイプとして第三者利用方略など他のタイプを加えて方略タイプの充実を図ることによって、対人葛藤解決方略の選択・使用の規定因とその生起機制をより体系的に、かつより詳細に明らかにしていく必要がある。

#### 引用文献

- 藤原武弘 1995 葛藤 小川一夫（監修） 改訂新版社会心理学用語辞典 北大路書房 p.38.
- 藤森立男 2002 対人葛藤 古畑和孝・岡 隆（編） 社会心理学小事典 有斐閣 p.154.
- Laursen, B. 1993 Conflict management among close peers. In B. Laursen(Ed.), *Close friendships in adolescence: New directions for child development*. San Francisco: Jossey-Bass. Pp.39-54.
- Laursen, B., & Collins. W. 1994 Interpersonal conflict during adolescence. *Psychological Bulletin*, 115, 197-209.
- 長峰伸治 1996 青年期の対人的交渉方略に関する研究—INS モデルの検討と対人文脈による効果— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, 43, 175-186.
- 長峰伸治 1999 青年の対人葛藤場面における交渉過程に関する研究—対人交渉方略モデルを用いた父子・母子・友人関係での検討— 教育心理学研究, 47, 218-228.
- Ohbuchi, K., & Baba, R. 1988 Selection of influence strategies in interpersonal conflicts: Effects of sex, interpersonal relations, and goals. *Tohoku Psychologica Folia*, 47, 63-73.
- 大淵憲一・福島 治 1997 葛藤解決における多目標—その規定因と方略選択に対する効果— 心理学研究, 68, 155-162.
- 大淵憲一・菅原郁夫・Tyler, T. R.・Lind, E. A. 1995 葛藤における多目標と解決方略の比較文化的研究：同文化葛藤と異文化葛藤 東北大学文学部研究年報, 45, 187-202.
- Ohbuchi, K., & Takahashi, Y. 1994 Cultural styles of conflict management in Japanese and Americans: Passivity, covertness, and effectiveness of strategies. *Journal of Applied Social Psychology*, 24, 1345-1366.
- 大迫弘江・高橋 超 1994 対人的葛藤事態における対人感情及び葛藤処理方略に及ぼす「甘え」

の影響 実験社会心理学研究, **34**, 44-57.

Selman, R. L., Krupa, M., Beardslee, W. R., Schultz, L. H., & Podorefsky, D. 1986 Assessing adolescent interpersonal negotiation strategies: Toward the integration of structural and functional models. *Developmental Psychology*, **22**, 450-459.